

**E—27 大正期における家庭科教育の問題点**  
**—臨時教育会議の論議を中心にして—**

別府大短大 坂本智恵子

1. 本研究は「教科の現代化・科学化」という教科研究の現代的課題に、家庭科教育史の研究を通してアプロ

一ちすることを主要な課題としている。1910年代の家庭科教育は家庭科教育史上「理科的家事科時代」（1912～1919）とよばれる。高等小学の理科に「家事」の時間を特設するという形で、家庭科教育の合理化・科学化が意図されたが、理論的・実践的に多くの問題点を持っていた。この問題点を解決し、第一次大戦前後の民衆の生活不安に対処するために、家庭科教育の改革が要求された。本研究では、臨時教育会議での家庭科教育改革に関する論議を中心にして、その問題点や歴史的背景を究明したいと思う。

## 2. 資料としては

- (1) 海後宗臣編「臨時教育会議の研究」
- (2) 桜井役「女子教育史」
- (3) 吉田昇「明治以降における女子教育論の変遷」
- (4) 石沢吉磨「家事学習上の諸問題」
- (5) 大江スミ子「応用家事精義」
- (6) 成瀬仁蔵「女子教育改善意見」等

## 3. 研究の結果は次のようにまとめられる。

- (1) 民衆の生活不安と生活向上をめざす運動。——米騒動前後の民衆の家庭生活の実態と、生活向上への努力。
- (2) 臨時教育会議にあらわれた支配層の危機意識とその対策。——女子教育・家庭科教育を中心に。
- (3) 1919年家事科独立の意味するもの。